

### 1. 背景とねらい

昨年度サイレージ用とうもろこしより耐湿性が強く、晩播適応性があり、作業適期幅の広い兼用型ソルガム「スズホ」を奨励品種に編入し転換畑へ普及を図った。ソルガムには、いろいろなタイプがあり、また品種ごとに生育特性や適正栽培方法は異なるので、「スズホ」の本県における生育特性と栽培技術並びに栽培農家の事例を参考に供する。

### 2. 技術の内容

- (1) 播種期：基本は日平均気温が15℃に達した頃（県南：5月中下旬、県中以北：5月下旬～6月上旬）であるが、「スズホ」は晩播適応性があるので、播種期を約1カ月延長することができる。
- (2) 栽植密度：栽植密度は耐倒伏性や収量に大きく影響する。栽植密度は15000本/10a（条間75cm×株間8.5cm）が適正である。よって、種子は1Kg/10aで十分である。
- (3) 耐湿性：地下水位が高くなり、土壌の含水率が増加すると生育ステージが遅れ、減収する。よって、栽培は収量及び機械作業の可能性からみて、地下水位30cm以下とする。
- (4) 除草体系：ソルガムに対して農薬登録のとれている除草剤のうちアトラジン水和剤は土壌処理、生育期処理どちらも有効なのでこの使用が望ましい。
- (5) 収穫と調製加工：乳熟期（標準播種：9月上中旬、晩播：9月中下旬）以降、強い降霜がある11月まで良質なサイレージ調製が可能である。よって収穫作業の幅は2カ月半にもわたり、稲刈り作業・秋の牧草刈等と競合しない。また、乳熟期から成熟期の間の成分組成の変動も少ないので、青刈利用でもサイレージ利用でも安定したものが得られる。
- (6) 家畜の嗜好性：嗜好性は良好でとうもろこしサイレージと同等であった。
- (7) 栽培農家の事例：複合経営において作業が競合しない点で最も評価が高かった。規模の小さい（5頭以下）繁殖農家は晩秋の青刈利用が多く、規模の大きい繁殖農家・酪農家・養豚農家ではサイレージ利用であった。とうもろこしとの混合サイレージを調製した農家もあった。

### 3. 指導上の留意点

- (1) 湿潤な圃場や重粘土で碎土不十分な圃場では播種量を10%増しとすること。
- (2) 種子は自家採種利用はできない。
- (3) 種子消毒剤を粉衣して使用すること。

#### 4. 試験成績

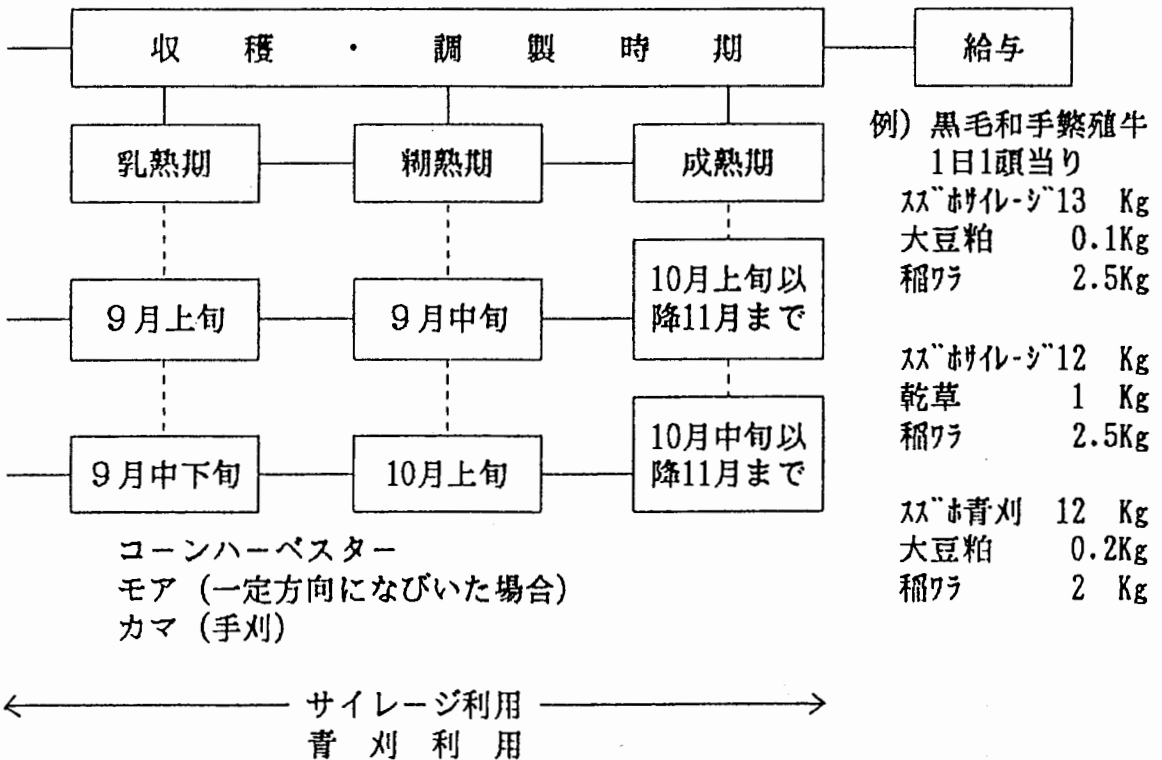
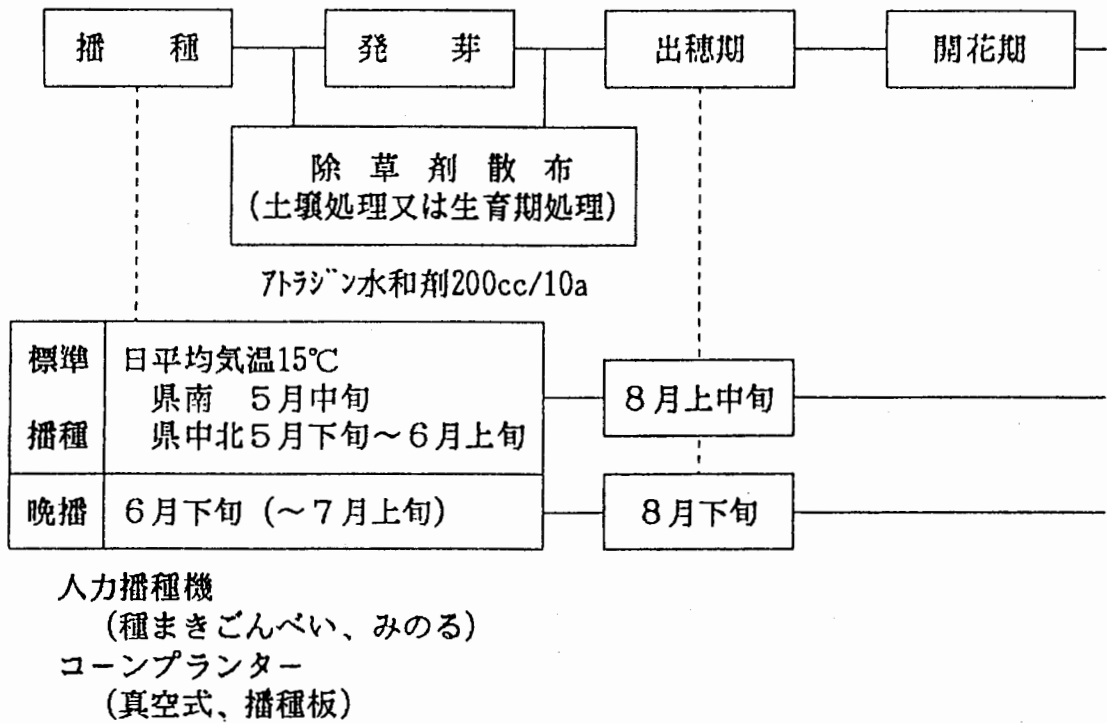


図 兼用型ソルガム「スズホ」の栽培利用体系